

〔論文〕

対人援助職としての防災教育の展開 —被災地から学ぶリスクマネジメントの普及—

長 橋 幸 恵

はじめに

2016（平成28）年4月から2017（平成29）年3月に実施した初年度の防災リスクマネジメントの視点に係る初期プログラムにおいて、東日本大震災の被災地に出かけ、被災した当時の話や現在の状況について、住民の声をすくいあげる研修を実施した。また、続いて翌年の2017（平成29）年4月から2018（平成30）年3月には、対人援助職としての防災教育の発信を中心としたプログラムと位置づけ、対人援助職に就いている卒業生も被災地研修に参加した。学生のリスクマネジメントを考える視点を広げるとともに、卒業生には、職場を中心としたコミュニティに持ち帰り、対人援助職としての防災意識を広めてもらう取り組みを継続的に実施した。この間の方法実践については、拙稿、「対人援助職としての防災教育の視点—被災地から学ぶリスクマネジメントの初期プログラム—」¹、「対人援助職としての防災教育の発信—被災地から学ぶリスクマネジメントの定着へ—」²に記した。

前者は表題にあるとおり、防災教育の視点から学ぶ、あくまで初期の実践的試案を提示したものであったが、後者では、研修内容をいかに持ち帰り、都市部（大阪）の防災に活用するかといった教育内容の定着についての啓発的な防災に関する発信に取り組んだ。

そこで本稿では、前稿2編の論稿を踏まえ、都市部での防災教育に関する今後の可能性を探るテーマを選び、対人援助職としての防災教育の展開に対する私見をまとめることとした。

第1章では、3年目の防災教育の組み立てと実施報告、第2章では、前回の研修プログラムとの改善点から得られた収穫内容、第3章では、今後の防災教育の展開および展望について論じたい。

1章 3年目の組み立てと実施報告

（1）2018（平成30）年4月から2019（令和元）年3月の研修プログラム

2年間のプログラムの実施内容を踏まえつつ、2018（平成30）年度の新たな取り組みを加えてプログラムを立てることにした（表）。それが、①被災地研修先の新規設定と、②大阪での防災を伝える研修先の見直しであった。

表. 3年目の防災研修プログラム

2018年 4月	5日	1年生を対象とした総合オリエンテーションにて昨年の事業内容を紹介し、本年度の計画予定を告知した。
	23日	生涯学習センター・COC委員会による第1回目の会議を開催。 本プログラムの内容と年間計画を議題としてはかる。
5月	21日	第2回目の会議を経て、学生防災リーダーの募集、選考基準を共有し、募集活動に入る。
	31日	募集締め切り。
6月	5日	学生防災リーダーを決定する。 (生涯学習センター・COC委員会で選考した6名を決定する)
	13日	学生6名によるボランティア内容の検討。なお、この検討には前年度の学生防災リーダーも参加する(実施内容の継続性を維持するため)。
7月	上旬	宮城県東松島市、矢本はなぶさ幼稚園・宮城県石巻市雄勝町、特別養護老人ホーム雄心苑との最終の打ち合わせと研修内容の調整をする。今回、初めて研修先となるなとりおひさま保育園、せんだい3.11メモリアル交流館に主旨を伝え研修内容の調整をおこなった。①
	19日	学生防災リーダー顔合わせ、前年度学生防災リーダーからの引き継ぎをおこない、研修テーマを伝える。
8月	20日～	被災地ボランティア研修(2泊3日)
	22日	一日目 なとりおひさま保育園の避難訓練の取り組み見学。①、宮城県東松島市、矢本はなぶさ幼稚園の園長先生と先生方による被災当時の取り組みについての聞き取りと研修。 二日目 石巻市立大川小学校視察。宮城県石巻市雄勝町、特別養護老人ホーム雄心苑での施設長による震災当時の経験を館内で説明を聞く研修、女川町に行き、復興の進行状況を視察する。 三日目 せんだい3.11メモリアル交流館にて復興の進行状況を把握した。当時の経験を語りながら、館内を説明いただき、研修。 3日間、なとりおひさま保育園の坂部肇氏に同行していただく。①
9月	下旬	東北研修の3日間の活動内容を再生し、記録化する。交流の具体的議事録と取材内容の明文化、および撮影写真やビデオ等の編集再生作業を含む。
10月	随時	作成したパワーポイントの作成まとめをする。使用する写真の検討をする。
11月	上旬	11月上旬 作成したパワーポイントの修正 発表の調整、準備をおこなう。
	下旬	11月下旬 作成したパワーポイントの最終調整と研修先への調整。

12月	随時 下旬	「大阪はっとコミ」21号の執筆編集作業に参加。 発表、講演の準備に入る。
2019年 1月	19日 20日	「ハッピー・サンデー」(クレオ大阪中央) のリハーサル。 「ハッピー・サンデー」(クレオ大阪中央) での発表会。 学生6名による研修内容の報告の場をもつ。その他に、学生防災リーダーのデモンストレーションでは、映像や資料を使用し、研修内容を聴衆者に伝えた(参加者約100名、但し本学教職員を除く)。
2月	15日 24日 28日	湯里地域での高齢者のつどい「笑ゆう会」で地域の高齢者に東北研修内容を伝える(参加者25名)。② 特別養護老人ホーム高秀苑でポスター発表と交流会をもつ(出席者50名)。 特別養護老人ホーム 城南ホームにて防災施設内研修に参加する(参加者20名)。
3月	7日 20日	特別養護老人ホームヴァンサンク東住吉での職員研修で、研修内容を発表する(出席者50名)。② 「大阪はっとコミ」21号 ³ (防災研修特集)を発行。 次年度の活動の立案と計画。

(注) 2017年度とは違う取り組みには、ゴシック体に活字を改めて記載しておく。

【被災地研修プログラム内容】

- ・研修日時：平成30(2018)年8月20日から22日(2泊3日)
- ・場所：宮城県仙台市、石巻方面
- ・行程
 - 1日目(8月20日) なとりおひさま保育園、矢本はなぶさ幼稚園
 - 2日目(8月21日) 石巻市立大川小学校、特別養護老人ホーム雄心苑、雄勝町、女川駅周辺
復興状況視察
 - 3日目(8月22日) せんだい3.11メモリアル交流館
- ・学生防災リーダー：総合保育学科2名、人間福祉学科2名、現代生活学科2名の合計6名の学生。
- ・参加者：学生防災リーダー6名、本学教員3名、他教員1名、なとりおひさま保育園事務長 坂部肇氏の合計11名。
- ・留意事項：実施にあたっては、現地での研修の目的をあらかじめ提示し、「大阪でも今備えることを考える」視点を養うように促した。

以上のプログラムの構成は、大きく分けて3段階で構成されている。まず、第1段階として、前年度からの引継ぎを受けて研修内容を見直し、実施すること。次に、その研修内容に学生・教員の討議を加えた防災研究の場を持つことである。それを第3段階で、いかにわかりやすく、効果的に

大阪で伝えるかという視点である。

次に、新たな視点を導入した今回の研修終了直後の参加学生の意見を示しておく。

学生防災リーダーによる被災地研修の感想（発表内容より抜粋）

- ・大阪では、宮城県のようにいまだ大きな地震は来ていませんが、ここ数十年後に南海トラフ大地震が来るといわれています。今回の防災研修をきっかけに、あわてず、正しい判断をし、前もって、避難準備しないといけないことがわかりました。

この研修を通して命の大切さを学びました。震災があっても、必ず生き延びるという気持ちが大切です。私がこのような気持ちになれた研修は、非常に有意義な体験でした。

（人間福祉学科 1 回生 阿部瑞希・中田愛里）

- ・現地の小学校では避難訓練をしていて、その通りに避難したにもかかわらず、津波によって沢山の方が亡くなってしまいました。それは、津波が来ることが想定されていなかったことが大きいですが、それ以上に、学校内のみで避難訓練をしていたことが大きいと思います。

大阪の避難訓練でも、体育館や運動場に集まり、そのまま避難訓練を終了する学校が多くあります。しかし、津波はどこまでくるのか分かりません。実際に大川小学校は、津波が来ないと言われていました。大阪の中で、いくら海拔が高い場所だと言われていても、その場所まで津波が来ないとは言えません。そのため、避難訓練のとき、事前に知らせることをやめ、一時間ではなく一日をかけ、津波を想定した避難訓練も必要だと思いました。

（現代生活学科 1 回生 谷口真愛）

- ・学校だけではなく地域で、避難訓練をすることが出来ればよいと思いました。実際に現地に行くと、八年たった今でも震災の傷は癒えないということが伝わりました。しかし、震災から復興した場所では、震災を後世に伝えて、備える大切さを教えてもらいました。

この教を今度は大阪の減災につなげていきたいと思います。

（現代生活学科 1 回生 甲斐萌子）

- ・この被災地研修を通して、宮城の方は本当に心があたたく、優しい方ばかりだと感じました。それは、被災して辛い思いをかかえながら、その経験を丁寧に親切に教えてくださるからです。一言ひとこと、心からにじみでる優しさを感じました。私は将来、保育者になります。

南海トラフ大地震がきたときに、子どもの命を一番に考え、適切な判断がとれるように、心がけたいと思います。（総合保育学科 1 回生 吉岡茂奈）

・この被災地研修で、一番印象に残っていることは、3.11メモリアル交流館で説明をしてくださった花端さんに言ってもらった言葉です。「震災が起きたことは辛いことだったけど、震災が起きていないと、今日こうして、あなたたちに出会えていなかった。震災が私たちをつなげてくれたね。そう思うと、震災が起きて良かったと思える。今を大切にね。」
と仰っていただきました。わたしはその言葉が忘れられなくて、感動の思いで胸がいっぱいでした。8年たった今でも、東北にはまだまだ復興が必要です。東北がより速く復興することを祈りながら、私は大阪の皆さんに、研修で学んだことを伝えていきたいです。

(総合保育学科 1 回生 平尾莉穂)

文中に下線で強調した点をまとめると、震災を後世に伝える大切さとともに、生き延びるための意志とそのための適切な判断を学ぶことの重要性を考えたものになっている。学生が主体的な学びの成果が表れたものと思われるが、この点を引き出すために新たにプログラムを加えた項目を2章に記しておきたい。

2章 前回の研修プログラムと違う要素

(1) 事前準備

研修プログラムにおいてゴシック体で示した、「①被災地研修先の新規設定」では、新しく2つの研修先を設定し事前準備をした。

(2) 研修先別プログラム

なとりおひさま保育園

一つ目に、なとりおひさま保育園で、避難訓練の取り組みを体験することにした。園児と学生防災リーダーには、当日、避難訓練が行われることは知らせず、とっさに行動に移せるかという問題提起を含むプログラムであった。

なとりおひさま保育園は、東日本大震災後に開設された園であり、大きな被害があった地域に隣接している。また、2018年8月20日現在も地震が続いているようで、もしもの地震を想定し、月に一度の避難訓練を欠かさず行っている。大阪とは、危機管理の意識に大きな差があると言える。2018年8月20日の新規プログラムを体験した学生の所見をまとめると次のようになった。

(学生の所見)

- ・先生たちの「地震が起きました」という発声がある。→園児がどのような反応をし、先生はどのように行動すればよいのかを実際に体験することができた。
- ・ベルが鳴ったら先生が子どもたちに合図を出して、部屋の真ん中に集まります。

- ・子どもたちは防災ずきんをかぶり、安全な外に出ます。乳児は、先生が抱きながら避難する。
- ・大人数用ベビーカートの中には、毛布、シーツ、防災ずきんなど、日常から、避難するときの道具が備えられていました。
- ・保育園の廊下は、物が少なく、逃げるための通路は安全なつくりになっていると教えていただいた。

せんだい3.11メモリアル交流館

二つ目に、せんだい3.11メモリアル交流館での復興の進行状況の把握があった。せんだい3.11メモリアル交流館は、東日本大震災を知り、学ぶための場であるとともに、津波により大きな被害を受けた仙台市東部沿岸地域への玄関口でもあり、交流スペースや展示室、スタジオといった機能を通じて、多くの来館者に震災や地域の記憶を語り継いでいくための場所である。震災から8年経過した時点での復興のプロセスにも防災の視点は備わっていると考え、この点もまた、今回の新規プログラムとして採用したわけである。前項と同様に学生の研修成果を摘記すると次のようになった。

(学生の研修成果)

- ・震災前の写真と震災後の写真が映像で確認できる交流スペースがあった。
 - 震災の写真や映像を流すことで、東日本大震災の記憶と経験を感じることができた。荒井駅に直結していて、地域の方々が普段、来て休憩されるスペースでは、津波の映像を流さないようにしているというお話を聞きました。
- ・震災と復興の記憶（2階展示室）

花淵みどり氏より被災地の当時の被災地の状況や日時を追って、壁面の写真パネル展示を見ながら、復興していく様子とともに花淵みどり氏の当時、被災した様子や地域の高齢者の状況についても語っていただき、「津波が来たあとは、周囲が色のない白黒の世界だった」の花淵みどり氏の言葉から、身近に津波の恐ろしさ、悲惨さが伝わる内容だった。学生防災リーダー「地震はほんとうに突然で、何気ない日常を奪っていくもの。だから今ある生活をまず大切にしなければいけないと感じた」。
- ・この施設に来た方が短冊に当時の状況や思いを書く場所があった。昔の地図に思い出が付箋で貼ってありました。震災後に訪れた感想などもありました。学生防災リーダー「昔をなつかしむ感想を見ると、震災前の風景に戻すことが、復興最終目的になるのではないかと思います」。

せんだい3.11メモリアル交流館での研修は、時を追って、災害が起こってから、復興までに建物や風景の時間の経過がよく理解できたのと同時に、現在も心の復興にはまだまだ課題があることを知った。

「自分だけが生き残った罪悪感があった。」「今は、生かされた命でチャンスを与えてもらえた」から語っていることと交流係の花淵みどり氏から聞き、そのように思う人々が多かったのだと知った。

被災前は大家族で暮らしていたが、被災後、仮設住宅に住むようになり、家族と離れて暮らすこ

とになる人が多いこと、仮設住宅から出た後も一人でアパートに移ったため、孤独になってしまった高齢者が多く、災害弱者となる高齢者への災害後の支援も対人援助に就く学生のリスクマネジメントの視点で、実感することができたのではないかと考える。

以上、2つの新しい被災地の研修先の設定をし、また、新たな防災の視点が加わることによって、学生の視野が広がり、現地での学びを深めることができたと思う。

(3) 発表への始動

次に研修内容をもとに学生・教員が討議を重ねて、研究の場を設定したその成果を記しておきたい。前述のプログラム内容の9月から11月のおよそ3か月間に、研修を終えた学生と教員とが、研修内容を振り返ることとした。これは、いかに研修内容をわかりやすく、効果的に大阪で伝えることができるかという視点を含んだものとなった。ここからパワーポイントで作成した内容を紹介する。



図1. 避難訓練の場面

なとりおひさま保育園での避難訓練の場面では、園児と学生防災リーダーには、避難訓練を実施することは伝えずに実施された。その時に、先生方がどのように園児を誘導し、園児はどのような反応をみせるのか、実際に防災頭巾をかぶり、避難する一連の流れをみて、もしもの災害時に備えて日頃から訓練している様子を見ることができた。

この体験は、是非とも大阪で伝える重要なポイントになると考え、当日の模様を時系列で示すパワーポイント（図1）と文案を作成した。なお、＜パワーポイント用の文案＞は発表用の原稿であり、約30秒程度で読み上げるための文章を用意した。

＜パワーポイント用の文案＞

なとりおひさま保育園の避難訓練の様子がこちらです。

まず、ベルが鳴ったら先生が子ども達に合図を出して、部屋の真ん中に集まります。

次に、子ども達は防災ずきんをかぶり、外に出ます。乳児は、職員が抱きながら避難します。ベビーカーの上には、毛布、シーツ、防災ずきんなど避難するときの道具が備えられていました。

災害時を想定して、非常持ち出し袋を備えていました。なとりおひさま保育園では、ベビーカーの上に、常に毛布やシーツを用意しているそうです。矢本はなぶさ幼稚園では、震災前は、非常用持ち出し袋は置いていませんでしたが、震災後の今、バスの中や各教室に置いているそうです。日々

災害のことを意識し、自分の命の大切さを理解することが大切であると感じました。

せんだい3.11メモリアル交流館



図2. せんだい3.11メモリアル交流館

せんだい3.11メモリアル交流館（図2）は、東日本大震災の当時はもちろん、震災後の都市計画でどのように復興がなされたのか、写真や映像で後世に伝える役割を担う情報交流館である。このたびの研修の視点のひとつに、復興の過程を確かめながら、次の防災への備えを考えたいと思い、次の文案を用意した。

<パワーポイント用の文案>

せんだい3.11メモリアル交流館の方から、実際に経験した人にしか語れないことを教えていただきました。大阪で起こる地震に備えることの大切さを、身に染みて感じました。

一人でも多くの方に復興の情報を知ってもらい、対策を今からしていくことが減災（げんさい）につながると思います。

復興



図3. 復興

東日本大震災から5年が経過した2016年に被災地を初めて研修に行った際は、特別養護老人ホーム雄心苑のある雄勝町は過疎地で、人口が震災後に減少したこともあってか、復興が進んでいなかった。津波でガードレールがみたことのない折れ曲がり方をしていて、いまだに、津波の爪痕が残されている状態だった。

震災後、8年が経過した今年度の被災地研修の際の雄勝町は、急激な変化をみせていた。海を囲むように驚くほどの高さで、防潮堤が建設され始めていた（図3）。海の様子は全く見えず、コンクリートの高い壁が延々と続く景色を見て、これで被害が少なくなるのであれば、仕方がないのかもしれない、そして、このことが、いいのか、悪いのかという考えなど、地

域住民でない、自分が発言することも失礼な気持ちになるほどであった。震災で、様々なことを経験した後も、様々な思いを抱えながら、地元の方は暮らしているのだらうと心情を察した。学生防災リーダーにも、ここ数年で町の様子の変化があることを実際の場所に行き感じ、学んだ復興を考え、発表内容に含めることとした。

<パワーポイント用の文案>

今回のテーマとして、復興の状況を見ることがありました。この壁は、去年は無かったそうです。次に津波が来た時に防げるように、このような防潮堤ができていました。あまりの高さでまるでここが現実でないような感覚を覚えました。海が完全に見えなくなっていたので、それほど津波が怖いものだったのだと感じました。

このような、パワーポイントのスライドを学生防災リーダーと、教員とで、わかりやすくまとめ、60スライド作成し、30分程度の発表とした。1スライド30秒程度が興味・関心の持続する範囲と考え、大阪での「伝える」研修の準備をした。

「伝える」ことでの防災教育の在り方

研修プログラムの重要なポイントは、「②大阪での伝える研修先の設定を考えること」が、学生防災リーダーの成長や防災教育の要になる部分である。今回は、「対人援助職としての防災教育の発信―被災地から学ぶリスクマネジメントの定着へ―」の2章⑤で、対人援助職に就いている卒業生が参加した。その卒業生の働いている場所での研修を行った。ここからは、大阪での研修先での感想をまとめたものである。

学生防災リーダーによる発表の施設からの感想

a. 特別養護老人ホーム城南ホーム（2018年2月28日）

- ・施設での防災に対する意識が職員はうすく、施設長や相談員など一部の人が知っているというだけではいざというときに協力し合うため、今回は話をきくことで各職種のスタッフの意識を持ってもらえることができたと思います。お話がきけて良かったです。
- ・被災地の状況が生々しく伝わってきて、感動的でした。避難訓練の大切さがひしひしと理解できた。
- ・災害があったときに、自分の命も利用者の命も守ることができるように普段からできることを考えようと思いました。実際に現地に行って調べてきているのが、すごいと思いました。
- ・実際に現場の方からお話を聞いた訳ではないですが、学生さんと先生の話聞き、涙目になりました。災害が起きた時に行動するのは、難しいでしょうが、利用者も自分の命も守っていけたらと思いました。
- ・特養でのお話は興味深く、参考になった。感染防止のためのマスク着用や、そこに名前を書いておくこと、薬が切れた時の対応、普段は意識していなかったことを再確認することができま

した。今後の対応に活かしていきたい。

- ・私が介護の仕事にたずさわっている限り、甘い考えで過ごさず、自分に何ができるかを考えたい。
- ・まとめ方が分かりやすい発表でした。

b. 特別養護老人ホームヴァンサンク東住吉（2019年3月7日）

- ・震災の意識が薄かったので、改めて意識しないといけないと思いました。
- ・改めて震災など、災害を考えるきっかけになった。では、そこで実際に何ができるのか、自分の職場ではどうなるのか、改めて点検が必要だと思います。
- ・震災の怖さ、備えの大切さがわかった。
- ・地震が起きた時に行動できる避難訓練が必要であると思いました。
- ・これを機にさらに防災について考えたいと思いました。勉強になりました。
- ・大阪でも災害は起こるということを意識していきたい。
- ・この施設も避難所になる可能性があると思いました。地域の方が来られると思うので、入居者様は当然ですが、その他の地域の方のことも考えないといけないのだと思いました。

今回、大阪で伝える新しい研修先の設定には、大阪城南女子短期大学（以下、「本学」という）と、地域が同じ特別養護老人ホームにした。学生防災リーダーによる発表の感想から、比較的、好印象をもたれ、防災の意識づけに役立ったのではないかと考える。

予測できない災害時のために、災害弱者である高齢者が多く暮らしている施設と連携し、いざというときに、地域で助け合うしくみ（公助）づくりも防災教育としては、重要なことである。

学生防災リーダーの活動を終えての感想

- ・被災地に実際に行って、改めて災害の怖さを知り、災害時のことを想定した避難訓練などがとても大切だと感じた。そして、過去に悲しい思いがあっても、前を向いて生きている被災地の方々を見て、生きることの意味、生きていることのありがたさを感じた。
- ・自分の周囲に被災地で学んだことを伝え、自分だけでなく周りの人にも更に防災について考えてもらえるようにした。もし地震や津波がきたらどこに逃げるかどういう対応をするかよく考えるようになり、防災の意識が高まった。
- ・被災地研修後に起こった、2019年の台風被害もあり、災害が身近にあるという実感がある。以前だったら、防災バッグの準備はしていなかった。しかし、家族と話をし、防災バッグに何をいれるのか、携帯の充電器を購入したり、水の備蓄、何かあった際に家族で落ち合う場所を決めた。
- ・自分は、避難訓練は、どこか他人ごとで参加してきた。しかし、学生防災リーダーになり、被災地を訪れて体験談を聞いたから命を守る対人援助職に就くからには、しっかりと避難訓練をする必要性を伝えていきたい。

上記の内容は、学生防災リーダーをした学生から聞きとった内容である。「自分自身が被災地を訪ねこのような活動を行って、クラスメイトや周囲の人々に伝えたか」の質問に対して、「クラスメイトに被災地研修の内容を伝えた。被災地に行ってこそ、備えることの大切さや経験してきた内容を話した」とのことであった。また、経験談を聞いたクラスメイトは、「自分自身も被災地を訪れ、自分の目で見てみたいと思った。対人援助職で仕事をし、もしも、災害が起きたら何を優先にしたらいいのか、高齢者で全介助が必要な方への対応について、もう一度考えるよい機会になった」と話した。周囲にも防災意識が確実に広がりを見せている。

3章 防災教育の展開

(1) 防災教育の情報発信

本学では、初期プログラムから、被災地から学び考えたことを、今後、対人援助職に就く学生に大阪の地で災害が起きた場合を想定し、自分のいる地域や周囲に伝える取り組みを継続している。

今回、2019年1月20日(日)に大阪市中央区にあるクレオ大阪中央で開催されたハッピー・サンデーで防災研修の成果を発表したところ、大阪日日新聞の取材を受けた。以下に、その記事の見出しと内容を引用し要約すると次のようなものであった。

「防災の具体策提言 大阪城南女子短大生が発表会「東日本」被災地訪問し学ぶ」

2016年度から防災リーダーを育成。学生は、宮城県を訪問し、被災地の現状や当時の様子を学びながら、大阪での対策を考えたり、防災の在り方を啓発している。津波が来た際、高速道路の上に上がって助かった事例を知った、現代生活学科1年の谷口真愛さんは「大阪でも非常時の階段を設置してもいいのでは」と提案した。災害時は各機関の連携が重要になるため、同科1年の甲斐萌子さんは「防災訓練は、学校だけでなく地域全体で必ず取り組むべきだ」と強調。〔大阪日日新聞〕2019年1月21日(月)朝刊)

取材の際にも、学生防災リーダーとして、被災地を訪れたからこそ、取材の中で、その場で発言・発信できたのだと感じた。被災地へ訪問し、大阪の地で伝えていく防災教育を3年間、継続したことで、多くの地域の方々に、本学の学生防災リーダーの活動内容が普及したことは防災意識を高める大きな成果であった。

(2) 被災地研修からの声で誕生した商品

被災地研修プログラムにて、毎年、被災地研修先である宮城県石巻市雄勝町、特別養護老人ホーム雄心苑の原律子施設長が話された中に、被災した時におにぎりなどは、支援物資で届いたが、「甘

いものが食べたかった」というエピソードがあった。

そこで、①高齢者に食べやすい、好きな味、②なるべく長期保存できる、③手軽に作れるものを検討し、できた商品が「トロミあんこ」である。2017年の学生防災リーダーとともに「トロミあんこ」を使った簡単なアレンジレシピも考え、作成した。災害時には、容器を用意することが難しいという声を聞き、水のはいったペットボトルに「トロミあんこ」の粉を入れ、振るだけで手軽につくれることも考えた。「トロミあんこ」という商品がもつ災害食への視点も、この被災地研修で実際の声を聞いたから考えることができた。被災した時の災害食の重要性にも気づき、商品として誕生したことは、大きな成果であった。以下に、その記事の見出しと内容を引用し要約すると次のようなものであった。

“大阪城南女子短大など開発 粉と湯で「トロミあんこ」”

あんこの味が付いた粉に湯や水を加えて混ぜるだけで作れる。「災害時の備えとして持っていてもらえれば」と呼びかけている。各地で開かれている防災啓発イベントなどでも紹介中。「普段から活用してもらいながら、いざというときに備えてほしい」(「大阪日日新聞」2019年3月11日(月)朝刊)

この商品開発についても、被災地に研修へ行っていないと、商品化できなかった防災の視点である。長期間の避難を想定し、災害食にも役立てる「トロミあんこ」の商品開発は、学生防災リーダーの発表とともに、災害時に備蓄し、備えておく商品としても啓発できた。また、その声を発した、被災地へ、完成した商品を届けることができたのも大きな成果である。

展望

初期のプログラムから3年目となり、学生防災リーダー研修及び、地域の住民や対人援助職に就いている人々に、被災地の体験談や知識が伝承された。それを学生防災リーダーがまとめることで、リスクマネジメントを考えることにより、下記の①～④のプログラムの構築ができ、学生防災リーダーが主体的に学べるシステムが整っていった。

しかし、このプログラムの今後の課題として考えることは、学生が伝えることによって、大学や、地域で実際に研修から防災に対する改善点や、備えるべきことが顕在化しただけに留まっていることにある。

今後の取り組みについて、次の5点にまとめることができる。

- ① 学生防災リーダーを決定
- ② 被災地での研修
- ③ 学生防災リーダーによる伝える内容検討
- ④ 大阪の地で防災情報発信

⑤ 大学・地域でのデモンストレーション

特に、⑤大学・地域で、実際に災害が起こった際のデモンストレーションをすることにより、より実践的な対策や減災について考える機会になる。もし、実際に本学の在る地域で、災害が起こった際に、特別養護老人ホームの雄心苑のように地域の人々が災害時に本学に避難してくる可能性は高いと考える。そこで、被災地で学んだことを活かし、学生防災リーダーが中心となり、大学内での防災訓練をできるようにしていく現実的な取り組みが必要ではないかと考える。

世界の中でも、災害の発生割合が高い日本は、防災意識が高まっている。災害時に周囲には、災害弱者となる方々を助けることのできる防災の視点について、大学等の教育の場でも考えていかなければならない。そこでは、地域と協働・連携していく中で、リスクマネジメントを考えることのできる人材を教育し、防災教育の普及を図ることがこれから望まれていると考える。

おわりに

対人援助職としての防災教育成果として、これまでに、合計16名の学生防災リーダーを育成してきた。被災地から防災の視点を学び、学生防災リーダーが卒業をし、対人援助職に就いている。学生時代に学生防災リーダーで実際に現地へ行き、被災地の人々の生の声を聞くことによって、いどこで起こるかわからない、災害も他人ごとではなく、備えることで人命を守ることを考えられる力が備わった。

この防災教育プログラムにおいて、「伝える」ことで、周囲の人々にも「備えること」の重要性が伝わったと期待している。実際に大きな被害を経験したことがない大阪の地において、学生防災リーダーである学生が、被災地にて現地の方から直接、話を聞き研修をすることで、被災を体験してなくても、メディアで聞く情報と違う、生の声が届き、その場所に行ったからこそ実感できたと考える。

この3年間の被災地研修プログラムで、多くの被災地の対人援助職の人々や住民の皆様から、多くのことを学ばせていただいたことに感謝したい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、特別養護老人ホーム雄心苑 施設長原律子氏、矢本はなぶさ幼稚園 園長山田元郎氏、なとりおひさま保育園 事務長坂部肇氏、せんだい3.11メモリアル交流館 交流係花淵みどり氏をはじめ、宮城県東松山市、石巻市の多くの方々にお世話になった。また、大阪の特別養護老人ホーム城南ホーム、特別養護老人ホームヴァンサンク東住吉にも感謝申し上げたい。

今回、新聞記事を掲載していただいた、株式会社新日本海新聞社 加星宙磨氏へも感謝申し上げたい。

参考文献

- 1) 長橋幸恵. 対人援助職としての防災教育の視点―被災地から学ぶリスクマネジメントの初期プログラム―. 大阪城南女子短期大学研究紀要. 第52巻, 2018.3, p49-62.
- 2) 長橋幸恵. 対人援助職としての防災教育の発信―被災地から学ぶリスクマネジメントの定着へ―. 大阪城南女子短期大学研究紀要. 第53巻, 2019.3, p121-132.
- 3) 大阪はっとコミ. 21号, 2017.3, 大阪城南女子短期大学 学生支援委員会発行.

【参考図版】



図A 防災の具体策提言 2019年1月21日(月)大阪日日新聞 掲載



図B 災害時にも手軽に甘味を 2019年3月11日(月)大阪日日新聞 掲載

(注) 図Aおよび図Bの新聞記事の転載にあたっては、株式会社新日本海新聞社の許可をいただいた。

(ながはし さちえ：講師)